



煉瓦色の記憶

雲南市病院事業管理者 大谷 順

昭和41年の夏、私の遊び場のバリエーションの一つに病院建設現場があった。ここで言う病院とは、今回の改修により姿を消した昭和42年竣工の旧本館棟のことである。当時は大変に大らかな時代だったようで、子供が工事現場で遊んでいても大目玉を食らうこともなかったと記憶しているが、はたして本当かどうかは定かではない。ただ、父が病院職員で、しかも我が家は病院の敷地内にあったことから、病院へは日常茶飯事に入ったりしていたので、私は「病院の子」と言われていたと、父や旧知の看護師さんたちから聞いていた。したがって恐らくは何らかの村度はあったものと考えられる。ともかく病院の建設現場で遊んでいたのは間違いのない事実である。新しい建物ができるのをワクワクしながら見ていたことや、また、やさしい（当時はそう思えた）看護師さんが「大きくなったらこの病院に帰ってきて私やつ（達）を診てね」と言われ、俄然その気になっていたことなどが、つい昨日のことの様に思い出されるが、それらセピア色の多々ある病院関連の思い出の中でもとくに覚えているのが無機質なコンクリートの建物の側壁に煉瓦（正確には煉瓦風のタイルであるが）が埋め込まれていく様である。

その意匠は、直方体の建物の両サイドと、屋上の排気口の前後面に施されていた様に記憶している。今となってはその意匠の意味するものを知ることはできないが、少なくとも私の眼には当時の町にあったどの建物よりも格好の良い建物のチャームポイントとして映っており、とくに煉瓦色の屋上排気口は病院のシンボルといってもよいくらい目立っていた。父の車で外出して大東に戻ってくる際、遠く幡屋方面からでも赤川越しに真っ先に眼に入る煉瓦色の建物、その威容は訳もなく誇らしく思えたものである。ところが、その病院のシンボルカラーがいつの間にか消えてしまっていた。正確な時期は覚えていないが、私が医大で学んでいる頃に、帰省（と言っても学校は出雲なので帰省というには少々大袈裟である）した際に、壁がコンクリートで覆われ、排気口は煉瓦色から緑色に変わっていたので驚いたのは覚えているので、恐らく昭和50年代半ばあたり、病院が黎明期を迎え、名称も「雲南共存病院」から「公立雲南総合病院」に変わった頃であろうか。意匠替えの理由は分からないが、当時の私は病院がなくなってしまった訳でもないのに妙な惜別感をおぼえていた。それほど私の中ではあの煉瓦色は、病院にまつわる様々な記憶と一体化していたのである。そんな「煉瓦色の思い出」も遠い昔のこと、病院を遊び場として育った落ち着きのない子供も、いつしか初老を迎える歳となり、縁あって新しい病院造りに携わるようになっていた。新病院外壁の意匠について建設JVからいくつかの色見本を示された時、昔の記憶が一気に蘇り、私は即座に「煉瓦色にしましょう」と口角泡を飛ばして力説していた。理由を聞かれ、前述のくだりを説明したが、古参の職員たちからは口々に「本当にそんな色だったか?」「はじめから緑色だった」と訝しがられたのは当然といえば当然、なにせ約40年も前の事である。写真で確認しようにも皆白黒写真で、緑だか茶だかいまひとつははっきりしない。自分の記憶も定かではなく、やはり気のせいであったか?と少々弱気にもなったが、工事は粛々と進み「思い出の煉瓦色」を基調とした新本館棟は遂に完成した。完成を報じた市報での挨拶文でも、新本館棟の煉瓦色は旧病棟へのオマージュであると述べてはみたものの、その後も誰も同調してくれる人は居らず、私の希望通りレンガ調の壁面は採用されたものの心の中ではモヤモヤした気持ちのまま時間が過ぎていった。そんな中奇跡は起きた。旧本館棟の解体が始まり、医局のある東棟との接続部分が壊され始めた時に、なんとコンクリートの上塗り部分が壊され、その下から懐かしい「煉瓦色」が現れたのを目撃したのである。懐かしい友に会った様な驚きと喜び、まさに溜飲の下がる思いであった。そして、その時確信した。古いものは壊されるのが定めとはいふものの、建物に込められた人々の思いは残っていく。この煉瓦こそ、当時の「雲南共存病院」が、地域医療の砦として大きく羽ばたき始めた時代の象徴であると。そして今回、一連の病院改修事業を終えるにあたり、この煉瓦の一部をモニュメントとしてしかるべき場所に設置しようと我儘を許して頂いた。先人の苦難や喜びその他諸々の想いを語る煉瓦色の壁面を、これからの地域医療を担い、伝えていく私たちの気持ちの象徴として、新本館棟ともども後世に残していくのが私たちの使命であることを皆で共有していきたい。そして、私は今日も煉瓦色で彩られた病院の壁面を眺めながら、この地、この病院で働けることの幸せを噛みしめているのである。